ポーツ　昭和57年(1982年)8月24日　火曜日

釣具のすべてが揃う 全道一の大型専門店 FISHLAND フィッシュランド ●白石店 白石区本通北6-11 ☎864-6131 ●新琴似店 北区新琴似2条1-11 ☎751-5263 ●北光店 東区北28条東8丁目11 ☎752-9111 釣堀 741-4292

にっかん

スポーツ用語

百までサッカー

戦い終われば

往年の名選手も「青春」おう歌

和やか愉快に… 四十雀サッカー

老いて？盛ん

みんなのスポーツ

「みんなのスポーツ」は読者の皆さんと一緒に作るページです。町のスポーツの話題、記録会、大会の日程、ゴルフのコンペ何でも結構です。お知らせ下さい。日刊スポーツ編集部（011－231－5110番）まで。

72歳、梁林さん（右）の激しいタックルに場内はヤンヤの声援

われらサッカーを愛す

札幌四十雀サッカークラブ
会長　山崎七郎

札幌40雀サッカークラブが誕生して30年、よくぞここまで……の感慨一入のものがあります。

結成以来、いろいろ曲折を経ながらも、現在のクラブの隆盛の姿をみるとき、サッカーへの情熱に支えられた先人たちの、なみなみならぬ献身を忘れることはできません。ここに、既に故人となられた方々を含め、結成いらい当クラブに関りをもたれた、多くの先輩諸兄に心から感謝の意を表する次第であります。

皆様すでにご承知の通り、当クラブは単に試合を楽しむためだけの目的で結成されたチームではありません。

北海道におけるサッカーの普及拡大のため、永年尽力されてきた方々が相集い、親善交流を図り、そして、さらなる発展を目指してその方策を語りあい、実践するために結成されたクラブであります。

年移り、構成員も大きく変っては参りましたが、この結成の主旨は今もって大切に伝承され、今後とも札幌40雀サッカークラブの精神的主柱として、永遠に残されていくものと、確信している処でございます。

現在、志を同じくする道内40雀クラブは11チームの多きを数え、全道40雀大会を頂点に、それぞれユニークな活動を展開しております。

当クラブでは、結成いらいこれらクラブとの友好に努める一方、広く道外にも球友を求め、神奈川40雀クラブを始め、東京、宮城、八戸各40雀クラブ、さらには在日朝鮮蹴球団、北大ＯＢ東京クラブとも交流の輪を広げて参りました。

この事業により吸収することのできた人的、精神的収穫は真に大きく、今後とも当クラブの発展を助長する、力強い支柱として作用することを肝銘し、各クラブの皆様方にあつく御礼を申し上げます。

最後になりましたが、北海道サッカー協会ならびに札幌サッカー協会には、当初の結成指導以来、格別のご理解とご支援を賜わりました。札幌40雀サッカークラブが、今日、めでたく創立30周年を迎えることのできましたのは、ひとえに両協会の並々ならぬ肩入れによるもので、感謝にたえません。

今後とも一層のご指導をお願い申し上げる一方、私どもクラブ員一同も志を新たにし、北海道サッカー発展のため、微力を尽してご協力申し上げることを誓約し、御礼の言葉に代えさせて頂きます。

札幌40雀サッカークラブ

創立30周年を祝う

北海道サッカー協会
会長　樫　原　泰　明

札幌40雀サッカークラブの創立30周年を、心から御祝い申し上げます。

顧みますと、我々サッカー関係者が40雀クラブという名に接したのは、昭和29年の北海道国体にさかのぼります。

当時、来道された日本蹴球協会役員団から、40雀クラブ設立趣意をお聞きし、さらに北海道での結成促進を要請されたのが、始めての出会いとなりました。

この時は、取敢ず道内役員で臨時的に40雀クラブを編成し、日本協会役員による40雀クラブと対戦し、快勝を納めたことが記録に残されております。

これが導火線となって、昭和32年に小樽と札幌に於て40雀クラブが結成され、定期戦を組んだのが発祥となりました。

以来30年、現在では地区協会所在地の殆んどに40雀クラブが結成され、地区におけるサッカー振興のため、活潑な活動を展開するまでに至りました。

北海道サッカー協会では、この間、道内40雀クラブの全道的な連帯と、親善交流の輪を広げるため、全国に先がけて昭和51年から全道40雀サッカー大会を主催し、現在までに12回の多きを数えるに至っています。

さらに昭和60年からは、会員の高齢化に対応して50雀大会を併催するなど、協会としても40雀クラブの育成のため、並々ならぬ努力を傾注して参りました。

このことは、40雀クラブが単にサッカーを楽しむだけのものでなく、本道におけるサッカーの普及と振興に寄与するという、特異な性格をもつチームであり、今後とも、この目的達成のため大いに尽力して頂きたい……という希いが籠められているのであります。

札幌40雀サッカークラブが、30周年を契機として、今後一層の発展をとげられますよう祈念すると共に、道内40雀クラブの先達として、サッカー普及と振興のため、益々活躍されんことを御願い申し上げ、御祝いの言葉といたします。

札幌40雀サッカークラブ

30年の歩みを祝って

札幌サッカー協会
会長　吉　田　帰　一

創部30周年、おめでとうございます。

北海道のサッカーと共に歩んだ30年の歴史、既に年老いて来た球友たちに接するたび、そのサッカーにかけてきた情熱の激しさを思わずにはいられません。

お蔭さまで本道のサッカーも漸く裾野が広がり、札幌協会だけでも登録メンバーは、1万2千人の大台を越えるまでに至りました。

しかも、単に底辺拡大に止まらず、技術面でも飛躍的に向上しており、ご同慶にたえません。

しかしながら、本道サッカー界が全国レベルを希むには、未だ数多くの問題点が残されております。

その1は指導者の決定的な不足であり、協会の行なう指導者講習会のみでは、到底充足することができません。

第2には競技施設、とくに芝グラウンドが極端に少いことです。北電では昨年江別市にサブグラウンド及び照明つきの立派なサッカー場を建設しましたが、文化都市を標傍する札幌市に、こうしたサッカー場が2～3面あって当然でないでしょうか。

第3には、半年間に及ぶ冬期間対策です。雪を嘆かずスキー、スケート等による筋肉トレーニングのほか、球技の技術向上に必要な充実した練習方法を早急に確立する必要があるのです。

これら諸問題を解決するため、協会としても種々方策を講じている処でありますが、40雀クラブにおかれても、懸案解決のため格別のご協力、ご尽力を賜わりたく、心から御願い申し上げる次第です。

終りに、今後益々のご発展を祈念し、お祝いの言葉といたします。

沿　革

札幌四十雀サッカークラブ
30年の歩み

〔四十雀クラブとの出会い〕

昭和29年8月、第9回国体蹴球競技が岩見沢市光陵中、東高グランドを会場に開催される。

役員として来道中の日本蹴球協会小長谷事務局長から「決勝前に日本協会役員中、40歳以上の者で編成した40雀クラブと、道協会役員とのエキジビションマッチを行なうので、道協会も同基準でチームを編成するように」との申し入れあり、初めて40雀クラブという名前との出会いとなる。

道協会日下理事長の下命をうけて荒常任理事が編成に着手するも40歳以上の役員が少く、取敢ず北海道は30歳以上に基準を切下げて編成し、同年8月25日正午から東京40雀クラブと対戦、若さにモノ言わせて4－0で快勝する。

本道における40雀クラブの発祥で、この試合に出場した役員は次の通り。（敬称略）

▩東　京

野津　謙、小野卓爾、竹腰重丸、宮本能吾、小長谷亮策、松丸重一、加茂　謙、福島玄一、山田午郎、村形繁明、篠島秀雄、高島保男。

▩北海道

小幡弥太郎、大森一郎、日下紀彦、原崎　正、湯佐　證、定免二三彦、辺見文彦、天野憲一、島津誠二、荒　友一、水上賞治、松田安雄、東　克彦。

〔札幌四十雀クラブの誕生〕

国体終了後、四十雀クラブは立消えになっていたが、昭和32年に至り、現役からハミ出し始めていた札幌蹴球団、同ベテランクラブ、藻友クラブの有志相集い「楽しむサッカー」を目標に札幌四十雀クラブを結成した。

同時期結成された小樽四十雀クラブと定期戦を組む協議が纏り、同年6月第一回定期戦を小樽市手宮グラウンドで開催（戦績不明）試合後、稲穂繁華街のダンスホール「エスカイヤ」を借切って盛大に懇親会を催す。

北海道における地区別四十雀クラブが誕生した記念すべき年となった。また試合後の懇親会に重要な意義を求める、現在の四十雀大会の原型も、この年に確立されたのである。

翌33年小樽四十雀クラブ来札し第二回定期戦。34年には遠く蹴友を求めて美唄に遠征、大いに楽しむサッカーを満喫する。

しかし活動が活潑だったのはこの頃まで……以降はクラブ員の転出、転勤相次ぎ、有力な幹部は当時隆盛期に入ったサッカーの普及と指導に追われ、「自ら楽しむ」日時をもてぬまま、四十雀クラブは永い休眠期に入ったのである。

〔再編への始動〕

昭和42年、札幌市に本道では初めてサッカー少年団が誕生し、以後年を追って全道各地に普及し始める。

この情勢に着目した、当時第9回国体後の協会組織の立直しと強化を進めていた原崎理事長（故人）が「底辺拡大と少年団の指導育成」を目標に「四十雀クラブの再編を進めるよう」綿谷弘一常任理事（現道協会副会長、室蘭ろう学校長）に指示。

これを受けて綿谷氏が昭和45年から準備に入り、翌46年、旧会員に新らしいメンバーを多数加え、総勢36人で新生「札幌四十雀クラブ」を発足させたのである。

▩登録会員

山中敏夫、辺見文彦、湊　　勲、堤　倖一、原崎　正、東　克彦、山崎七郎、定免二三彦、天野憲一、吉田帰一、水上賞治、荒　友一、吉田　勇、沢口景二、松井敏二、山田和千代、西山保直、新保　武、野田一也、寺井　孔、毛利光二、相沢哲夫、新妻　徹、白田　寛、神戸　功、佐藤　信、北山修三、浜田尚昭、黒坂哲也、綿谷弘一、柴田　昌、土橋和英、中平　勉、山本　勲、浜中得一、米永碩男。

〔本格活動期に入る〕

部長 山中敏夫氏（故人）監督 辺見文彦氏（故人）主将には湊勲氏が就任、事務局長には綿谷氏という体制で、ユニフォームも制定、協会登録も完了した「札幌四十雀クラブ」は、いよいよ本格的な活動を始めることになる。

組織的には綿谷事務局長の献身的な肩入れにより、会費の完全徴収、連絡網の整備、現在も継続されている通信の発行など、次々に新機軸が打出され、年長者順によるポジション決定権、同宴席配列など、ユニークな試みがなんの抵抗もなく受け入れられ、定着していったのである。

対外的にはサッカー少年団、中学チームとの試合、小樽四十雀クラブとの定期戦復活、さらには北大ＯＢを主体とする東京四十雀クラブとの親善交流も活潑化した。

昭和47年には遂に社会人リーグへの参加を決め、三部リーグに登場することになる。しかしこの試み、協会役員の多い当クラブは常時出席者が足りず不戦敗？の連続……相手チームに失礼だということで、一年限りで中止となる。

「自分がボールを蹴る」こと以外の活動としては、全道大会優勝チームへの金銭援助、少年団チームへのコーチ派遣、各種サッカー教室の協賛、女子チームの創設～指導など普及事業に積極的に手をひろげ、逐次ＴＶ、新聞雑誌などでその活動ぶりが紹介されるようになる。また昭和53年初めて神奈川四十雀クラブと交流を開始、以降、宮城四十雀、八戸四十雀クラブとも親善交流の輪を広げていった。

〔全道四十雀サッカー大会〕

昭和50年、札幌以外の各地でも活潑化してきた四十雀活動に刺戟され、道サッカー協会内に「親善交流を主目的とした全道大会開催の可能性について」の論議高まる。

原崎理事長の指示で荒普及委員長（現札幌四十雀運営委員長）綿谷社会人委員長（前出）が51年度実施を目指して企画に入り、菊地理事（現道協会理事長）が「四十雀クラブ編成基準」を作成、理事総会の議決を経て昭和51年9月、第1回全道四十雀サッカー大会（於札幌）開催の運びとなる。

これまでに四十雀クラブの結成されていた地域は札幌、小樽、函館、室蘭、旭川の五カ所、これに新しく室蘭四十雀の分クとして、登別が室蘭楽蹴四十雀の名で参加、全国初めての協会主催による四十雀大会がスタートした。

以降、函館、札幌の二チーム参加をはじめ、地区では北空知、釧路、苫小牧、千歳が相次いでクラブを結成して大会に参加、昭和60年度からは新たに50歳以上を編成基準とする50雀大会を併設するなど、確実に隆盛の一途をたどって来ている。

〔現況と将来〕

札幌四十雀サッカークラブは、「サッカー人口の底辺拡大と普及」の面で常に先導的役割を果しながら生々発展して来た。

これまで全道大会に於て２度優勝を果し、さらに戦力アップと、グランド難解消のため昭和56年度以降エルムカップリーグに参加して、若さ溢れる社会人チーム相手に、これも２度の優勝を果し「老いてますます盛んなサッカー活動」を続けている。

昭和62年度会員数55名（内９名は女子部員）出身校別では27校の多きを数えることで分るように「閥をつくらず、短期在札でも会員の紹介さえあれば入会を拒まない」ユニークな構成方針を貫いてきた。

このため、かって在籍した会員は、遠く九州から関西、関東にかけ40人余が散在会員として、サッカーはもとより仕事、家庭を通じて在来会員と旧交を暖めあっているのである。

30年に及ぶクラブの歴史……それはまた今後の40年、50年につなげる原動力となり、札幌四十雀クラブはこれからも元気に歩みつづけることを確信している。

最後に、当クラブの精神的支柱として語りつがれ、会員名簿に、そして通信に書き綴られて来た小詩を紹介してこの項を終る。

みんなの協力で築きあげた
30年に及ぶ　わがクラブの歴史

いつまでもサッカーマンの情熱を
かきたてる
楽しいクラブでありたい

そのために　初心にかえり
参加することに　意義を求め
奉仕することに　喜びを感じよう

年　表

- S 29. 8　第９回国体東京40雀（役員）対北海道役員戦行われる。
- S 32. 6. 16　札幌40雀結成、小樽と定期戦。
- S 34. 7. 19　春の定期戦（於 小樽花園グラウンド）
- S 35. 10. 9　秋の定期戦（於 小樽花園グラウンド）
- S 46. 5. 1　再編成し、社会人チームとして登録。
- S 46. 9. 11　日本蹴球協会創立50周年で永年功労表彰を受けたクラブ員。（写真中３名が創立時の会員である。）

日本体協ロビーにて（栗林薫氏蔵）

故 栗林 薫（現会員）
故 林 良一（旧会員）
故 藤沢信一（小樽）
故 原崎 正（旧会員）
故 斉藤 斉（札幌協会）

（再編時事務局長 綿谷弘一氏（S62.6.3写）

綿谷元事務局長談（62. 6. 3 室蘭ろう学校長室にて）

原崎先生にやれと言われ、教え子として引受けた。なかなか集まらない会費集め、ユニホームの選定と背番号決め（希望番号重なり譲り合わない）、試合の連絡と人集め大変でした。

- S 47. 5. 20　月寒公園にある月寒荘で総会を行う。
- S 47. 5. 21　社会人リーグ第3部に参加する。集り悪く棄権、敗戦の連続で最下位となる。
- S 51. 8. 7　NHKテレビ〝夏に鍛える〟に出演（８月２日収録）
  出場資格、お腹の出ている人から順に選ぶ。対戦相手、白石小サッカー少年団。
- S 51. 9. 26　第１回全道40雀大会開催　（於 札幌市立向陵中学校グラウンド）

四十雀クラブ編成基準

（北海道サッカー協会作成）

（目　的）
1. 四十雀クラブは、オールドサッカーマンの親睦融和と青少年サッカーの育成を目的とし、あわせてサッカー界運営の円滑と発展に寄与するために編成する。

（加盟登録）
2. 四十雀クラブは、必らずサッカー協会に加盟登録するものとし、登録チームとしての一切の責を負うものとする。

（年令制限）
3. 会員は、登録年度４月１日において満35才以上の者とする。ただし、必要により、満35才を過ぎた者は年度途中においても追加登録をすることができる。